『抵抗―死刑囚は逃げた』 ©1956 Gaumont－Nouvelle Editions de Films

究極の芸術＝娯楽映画 『抵抗―死刑囚は逃げた』

映画をもっと深く楽しむために
映画の國 エイガノクニ
¥0 TAKE FREE!
Feb.2009 n.04

CONTENTS

究極の芸術＝娯楽映画 『抵抗―死刑囚は逃げた』
『女鹿』が背負った様々な事情
盟友にして師匠 ―シュレンドルフの見たファスビンダー―（吉田広明）
［連載］
☆映画祭ディレクターの映画祭りな日々（矢田部吉彦）
☆世界映画探訪（ドクトルX.）
☆映画の中のジャズ、ジャズの中の映画（上島春彦）
☆映画と本の話（遠山純生）
☆映画人が選ぶ映画史上の傑作 ～第四回：サム・ライミ～

『抵抗―死刑囚は逃げた』撮影中のブレッソン（左）とフランソワ・ルテリエ

囚人はアメリカ人でもヴェトナム人でも良かった。誰の助けも借りずに脱獄したいと願う人間の精神にしか興味がありませんでした。——ロベール・ブレッソン

アンドレ・ドゥヴィニは こんな人!

1916年5月25日生まれ。第二次大戦勃発直前の39年にフランス軍に入隊する。同年ドイツ軍との戦闘で優秀な成果をあげ、23歳にして初の戦争レジヨン・ドヌール勲章を受勲。40年に歩兵連隊を率いてドイツ軍との戦闘に参加するが、過って味方に撃たれ負傷する。ドイツ軍による占領後は、対独レジスタンス活動に加わった。42年10月、とあるレジスタンス組織の指揮官の一人となり、活動員をスイスに逃がしたり、ジュネーヴ経由で英国に情報を送ったり、ドイツ軍の戦争資材を破壊したりした。

43年4月14日、レジスタンス仲間と共に、ニースでドイツ軍に強力していたイタリアの防諜スパイを射殺。しかし別のドイツ人…

…し安全ピンで手錠を解錠する方法を発見し、独房内のコンクリート床でスプーンを砥ぎ、房内下部の小割板を取り外してその開口部から房外へ出ることができるようになった。8月24日から25日にかけての夜、ドゥヴィニは新参の同房者と共に毛布とマットレスのカバーから作ったロープと、古いカンテラから作った鉤針を手にして脱獄に成功。監獄の中庭で、ドゥヴィニは歩哨を一人地面に投げ飛ばし、銃剣で刺し殺した。その後二人はロープと鉤針を使って監獄の塀を乗り越え、逃げた。

脱獄後はドイツ軍の捜索をかわし、レジスタンス仲間の助けを借りてスイスへ逃亡。ドイツ軍は報復としてドゥヴィニのいとこ二人を逮捕し、強制収容所送りにした。ドゥヴィニ自身はスイスを離れてスペインへ行き、そこで再逮捕されたがまたしても脱獄。その後フランス軍に再入隊し、アルザス解放に参加。戦後、シャルル・ドゥ・…

『抵抗―死刑囚は逃げた』 ©1956 Gaumont－Nouvelle Editions de Films

ロベール・ブレッソン、『抵抗―死刑囚は逃げた』を語る

ドストエフスキーがロシア小説であり、モーツァルトがドイツ音楽であるように、ロベール・ブレッソンはフランス映画なのだ。
——ジャン＝リュック・ゴダール

ロベール・ブレッソン——一匹狼

アキ・カウリスマキ

その呪われた職業においてブレッソン氏ほど孤独な者でも、完全に孤立しているわけではない。彼にはダグラス・サーク（あるいはデトレフ・ジールク）という名の兄弟がいた。メロドラマの領域でブレッソンに挑戦し続けた人物だ。ブレッソンがどれほど痛切に慈愛というカトリック用語の背後に隠れたがっていても、彼は自分がメロドラマ映画の作り手であることを否定できない。仲間たちである上述したサークや小津安二郎（彼は表面上ブレッソンにより近いように見えるが、見かけに騙されないようにしよう）と一緒に、ブレッソンは彼なりの静かなやり方でルビッチの伝統を継続していたのだ。

ブレッソン氏だけが、メロドラマ的な映画様式に自らを結び付ける要素が（伝統的にも視覚的にも）何もないところまで、自分の様式を推し進めたのである。実際、彼が関係したがるような芸術様式など、どこにもないのではなかろうか。ここで冒頭に立ち戻ろう。ブレッソンは一匹狼なのだ。

慈愛抜きで、彼は人生も含めてすべてを否定する。大賛成だ。たぶんジェイムズ・エイジーはこの件について何か言うべきことを持っていただろうが、彼はこの世ではもう何も言えない。エイジーは既に、そして無事に、苦しみを逃れて慈愛の下にいるのだ。

私が本当に言おうとしていること、それはブレッソンがメロドラマ監督であるだけでなく、喜劇映画作家でもあるということだ。彼は——必要とあらば——たやすくステージ上でどんなレニー・ブルース風情にでも挑むことができたのだ。しかしそうした側面は隠れてしまっている。

音楽は映画に必要ないと書いた当の人物が、翌日には『少女ムシェット』の中でインストゥルメンタルのギター曲を使った。要するに、ブレッソン氏のリアリスティックな嘘の数々なしに、この神に忘れられた世界で生き残ることなど私にはできない。その嘘の数々に、私は死ぬまで、そして死んでからもずっと感謝し続けるだろう。

『抵抗―死刑囚は逃げた』をめぐる証言

①ルイ・マル

『死刑台のエレベーター』(58)、『恋人たち』(58)、『鬼火』(63)等で知られる映画監督ルイ・マル（1932年～1995年）は、『抵抗―死刑囚は逃げた』で助監督見習いとして現場に就いていた。以下に紹介するのはそのときの想い出をマルが語ったもの。

『抵抗―死刑囚は逃げた』でブレッソンと初めて仕事をした際、彼は私に興味を持ってくれました。私がドキュメンタリー映画出身だったからです。ブレッソンは私に、囚人が壁を掘るのに使うスプーンを始めとする細部の面倒を全部みてくれ…

…クワクしているんです」と話しました。撮影が始まる前にブレッソンの役に立てたように思ったし、彼の準備や配役のやり方は魅力的で、多くのことを教わりました。ブレッソンが映画を撮影しているときに、私は監督からはそれほど多くを学べな…

②ダニエル・クトー

『抵抗―死刑囚は逃げた』礼讃①

ビクトル・エリセ

『抵抗―死刑囚は逃げた』礼讃②

フランソワ・トリュフォー

詩人がペンを使って自己表現するように、ブレッソンは映画によって自己表現する。
——ジャン・コクトー

映画祭ディレクターの映画祭りな日々

矢田部吉彦

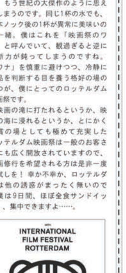
…に発表の場を与えるだけではなく、映画製作を金銭的にサポートしたり、プロデューサーが企画をプレゼンできる場を設けたりするなど、独立系映画の製作面に大きな貢献をしているからです。

実際に、ロッテルダム出身の監督がカンヌやヴェネチアで活躍というのは珍しいことではありません。なので、毎年ロッテルダムに通うことは、映画の未来を観に行くことでもあるのです。

というわけで、今年も1月21日から31日まで開催されたロッテルダム映…

今年は監督作1～2本目という制限を設けた「輝ける未来」部門がメインですが、この部門だけでも100本近い作品があります。もちろん中堅監督の新作部門もありますし、短編部門や実験映画部門なども充実して、現代トルコ映画特集なども大好評。日本からも、長短編含めて30本近い作品が出品されましたね。

もちろん、1日5本も6本も観ていると、全てが傑作というわけにはいかないです。ハズレの日は延々と未熟な作品に付き合うことになり、まさに千本ノック状態でグロッキーに…



第38回(2009年度)ロッテルダム国際映画祭のポスター

ドクトルX.の世界映画探訪

～本邦未DVD化映画を漁る～

私はなるべく早く、『いとこ同志』に変装を施したリメイクを作りたいと思っていました。『女鹿』がまさにそれだったんです。「偽装したリメイク、これは俺にとって最大の成功を収める映画になるぞ。みんなリメイクだと気づかないから、うまくいくはずだ」と思ったんですよ。——クロード・シャブロル

『女鹿』が背負った様々な事情

『女鹿』は一九六八年から一九七一年までにかけてクロード・シャブロルが発表した六本の作品群——シャブロル監督作中最良の映画群に数えられる、『女鹿』(68)、『不貞の女』(69)、『野獣死すべし』(69)、『肉屋』(70)、『破局』(70)、『夜になる直前』(71)——の、最初の作品にあたります。…

『女鹿』ジャン＝ルイ・トランティニャン(左)とステファーヌ・オードラン ©BRINTER

『女鹿』でシャブロルは、彼が名人芸を披露することの証明を提出している。隅から隅まで、このうえなく美しい色彩に染まった映画だ。
——ジャン＝ルイ・ボリー（作家・映画批評家）

『女鹿』ジャクリーヌ・ササール(左)とステファーヌ・オードラン ©BRINTER

＜あらすじ＞

セーヌ川に架かるポン・デ・ザールの路面に鹿の絵を書いている娘(ジャクリーヌ・ササール)に、黒いコートをまとった女(ステファーヌ・オードラン)が札を投げて施す。コートの女はフレデリックという名の独身のブルジョアで、娘の絵の才能を褒めそやす。その娘ホワイは、フレデリックの家で囲われることになる。その後二人がフレデリックの別荘があるサントロペへと赴くと、そこにはロベーグとリエという二人組の居候がいた。彼らはフレデリックに寄生する、彼女の手下のような存在らしい。ある夜ホワイは、別荘で催されたパーティでポーカーに興じていた建築家ポール(ジャン＝ルイ・トランティニャン)に惹かれるが……。

監督・脚本：クロード・シャブロル／製作：アンドレ・ジェノヴェ／脚本：シャブロル、ポール・ジェゴフ／撮影：ジャン・ラビエ／音楽：ピエール・ジャンセン／出演：ジャン＝ルイ・トランティニャン、ジャクリーヌ・ササール、ステファーヌ・オードラン、アンリ・アタル、ドミニク・ザルディ
1968年／フランス＝イタリア／カラー／95分PAL原版／フランス語モノラル／日本語字幕／ドルビーデジタル
封入：解説リーフレット（執筆：遠山純生）

連載 映画の中のジャズ、ジャズの中の映画

上島春彦

第四回 『拳銃の報酬』とジョン・ルイス

『拳銃の報酬』ハリー・ベラフォンテ

今回は映画史的には「最後の古典的フィルム・ノワール」と呼ばれ、また黒人を主人公にしながら黒人観客マーケットを特別に想定することのない犯罪映画として先駆的な役割を果たし、同時に監督ロバート・ワイズにとっても画期となった『拳銃の報酬』(59)とその音楽担当者ジョン・ルイスを取り上げたい。『ウエストサイド物語』の大成功で大作ミュージカル映画のオーソリティ的な存在になってしまう以前、ワイズはむしろ中規模予算の映画に手腕を発揮する人材だと思われていた。RKO映画の編集者として出発したキャリアからすれば、それは当然のことだ。このスタジオは業界で「低予算ジャンル映画のデパート」と呼ばれていたから、ワイズには、予算の有効活用はプロフェッショナルとしての至上命題であった。従ってワイズが『拳銃の報酬』に監督として起用された第一の理由は、乏しい予算を無駄なく使ってくれる男だからという出資者側の思惑にあったはずだ。その製作主体は「ハーベル」。これは俳優ハリー・ベラフォンテの名前を縮めたもので、即ち彼が『拳銃の報酬』を作るために…

映画と本の話

遠山純生

サルマン・ラシュディ、と言えば国際問題にまで発展した『悪魔の詩』事件で有名なボンベイ出身の作家だ。…

『オズの魔法使』（ヴィクター・フレミング、39）

BFI Film Classics : The Wizard of Oz
Salman Rushdie, BFI Publishing

ハルーンとお話の海
サルマン・ラシュディ著 青山南 訳/国書刊行会

『悪魔の詩』事件の後、初めてラシュディが書いた児童向けの本。言論弾圧により「お話」をできなくなった自らの立場を、主人公の少年ハルーンの父親に託しているところもある。設定や展開にも、言われてみれば『オズの魔法使』を意識したと思しき箇所が散見される。『オズの魔法使』のBFI本はこの本の刊行後に書かれた。

もちろん、個人的な見解もたっぷり入っている。例えば、ドロシーのカンザスの故郷——何もかも灰色で、大人は邪悪な者か力の弱い者しかいない——は、本当に"わが家に勝るところなし"の文句にふさわしいところなのか？とのある意味本質的な一撃。さらに、マンチキンランドは(落下してきたドロシーの家に押しつぶされて死んだ)「東の魔女」の邪悪で独裁的な権力下にあったのに、彼女の専制の痕跡が認められない(兵士も警察組織もないばかりか住民たちもおびえておらず、道路や家々も清潔である。なのになぜ「東の魔女」は嫌われているのか？との突っ込み、あるいは、ラシュディは邪悪な「西の魔女」に秘かに尊敬の念を抱いたことを告白する。…

盟友にして師匠 ——シュレンドルフの見たファスビンダー——

吉田広明

「ニュー・ジャーマン・シネマ」の代表的監督の一人とされ、『ブリキの太鼓』(79)、『ボイジャー』(91)、『魔王』(96)等で今や世界的な映画監督となったフォルカー・シュレンドルフ(一九三九年～)が、ライナー・ヴェルナー・ファスビンダーとの交友関係や、ファスビンダーの仕事ぶりを振り返ったエッセイがある。以下でそのエッセイの内容を紹介し、シュレンドルフの目に映った若き日のファスビンダー像を垣間見てみよう。

フォルカー・シュレンドルフ

人間関係やなんかを扱った人生談はどれもメロドラマだ。だから僕はメロドラマ的な映画は正しい映画だと思う。でもアメリカ風のメロドラマの作り方は、観客に感情しか残さない。僕は観客に、感情に加えて彼が感じていることを省察し分析する可能性を与えたい。
——ライナー・ヴェルナー・ファスビンダー

ライナー・ヴェルナー・ファスビンダー DVD-BOX 3（三枚組）

ますます評価の高まる鬼才の出発点。若者の鬱屈した感情の爆発、愛と裏切りの中のあてなき彷徨と破滅、映画撮影に現場で繰り広げられる支配・暴力・依存の関係。強烈な3作品。

発売・販売元：紀伊國屋書店
価格：¥15,120（税抜：¥14,400）
発売日：2009年2月28日(土)

『悪の神々』 ©Rainer Werner Fassbinder Foundation All Rights Reserved

収録作品：

『出稼ぎ野郎』 Katzelmacher

『悪の神々』 Götter der Pest

『聖なるパン助に注意』 Warnung vor einer heiligen Nutte

1970年／ドイツ／カラー／100分／ドイツ語ステレオ／日本語字幕／ヴィスタサイズ／ドルビーデジタル
封入：解説ブックレット（執筆：渋谷哲也、柳下毅一郎、梅園房良）

第四回 映画人が選ぶ映画史上の傑作

サム・ライミ

ホラー／SF映画

『たたり』（ロバート・ワイズ、63）
『タイム・マシン/80万年後の世界へ』（ジョージ・パル、60）
『悪魔の呪い』（ジャック・ターナー、58、未）
『メトロポリス』（フリッツ・ラング、26）
『猿の惑星』（フランクリン・J・シャフナー、68）
『レイダース／失われた聖櫃』（スティーヴン・スピルバーグ、81）
『地球が静止する日』（ロバート・ワイズ、51）
『JAWS／ジョーズ』（スティーヴン・スピルバーグ、75）
『エイリアン』（リドリー・スコット、79）
『月世界旅行』（ジョルジュ・メリエス、02）

映画雑感

特集上映「紀伊國屋書店レーベルを讃える」 IN シネマヴェーラ渋谷（2009/02/28 ～ 2009/03/20）

上映作品：『肉屋』『不貞の女』『女鹿』『旅芸人の記録』『アレクサンダー大王』『吸血鬼ノスフェラトゥ』『フォーゲルエート城』『最後の人』『戦艦ポチョムキン』『メトロポリス』『スピオーネ』『毒婦高橋お伝』『はなればなれに』『離魂』『大狼』『家宝』

KINOKUNIYA ONLINE DVD STORE Forest plus
http://forest.kinokuniya.co.jp
DVD通販なら、紀伊國屋運営DVD専門ショッピングサイト「Forest Plus」

次号は2009年3月中旬発行予定です。

2009年2月17日発行
発行：(株)スターライトフィルムズ
編集人：遠山純生
協力：(株)紀伊國屋書店
デザイン：ワイト堂
WEB版「映画の國」
http://eiganokuni.com/

本紙に掲載の記事・写真等の無断転載及び複写を禁じます。